様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ９ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０２２１

研究課題名（和文）話者指向性の意味論・語用論―慣習的推意を中心に―

研究課題名（英文）The semantic and pragmatic approach to speaker-orientedness: with special reference to conventional implicature

研究代表者
澤田　淳（Sawada, Jun）

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：８０５８９８０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語の話者指向性を反映する言語表現（特に、慣習的推意とダイクシスに関わる表現）について考察をおこない、それらの言語的特徴を類型論的・歴史的な観点から相対化した。日本語は、類型論的に話者指向性（または、話者の視点）を反映する言語表現を相対的に多く有する言語と考えられるが、そのような話者指向的表現の幾つかは、意味的・語用論的変化を通じて、歴史的に発達したものである。

研究成果の概要（英文）：This project studies the Japanese linguistic expressions that reflect the speaker-orientedness(e.g. conventional implicature and deixis) and relativizes their characteristics from the typological and historical perspectives. Although it can be characterized that Japanese has typologically rich speaker-oriented expressions, some of the expressions have been historically developed through the semantic and pragmatic change.

研究分野：言語学

キーワード：語用論　意味論　話者指向性　慣習的推意　ダイクシス　直示

１．研究開始当初の背景

自然言語に存在する表現の中には、その意味の一部、または全てが、命題的・真理条件的な意味には還元できない表現が存在する。その 1 つが指示詞や直示動詞などの「ダイクシス」（deixis）の表現であり、その意味は、発話場面に関係づけられて解釈される発話場面依存的性質を持つ。また、「慣習的推意」（conventional implicature）を含む表現も、言語的にコード化されているものの、命題的・真理条件的意味からは独立した意味を表している。ダイクシスや慣習的推意の表現は、狭い意味での意味論では扱いが難しく、一般に、語用論の研究対象として扱われている。

ダイクシスと慣習的推意は異なる現象であるが、両者は基本的に「話者」の視点や評価を含む「話者指向性」を有する点で、興味深い共通性が認められる。話者指向性を反映するダイクシスや慣習的推意の表現は、日本語には特に豊富に存在し、日本語の特性を探る上でも興味深い研究対象となると考えられるが、伝統的な国語学・日本語学の研究の中では、これらは未だ十分に共有された概念とはなっていないのが現状である。

２．研究の目的

そこで、本研究では、主に日本語を対象として、話者指向性を反映するダイクシスや慣習的推意がどのような表現に現れているのかを調査することにした。合せて、類型論的、歴史的な観点からの相対化を試みた。

具体的には、話者指向性の反映の仕方が、言語毎でどのように異なっており、また、歴史的にどのように変わってきているのかを明らかにすることを目的に考察をおこなった。

３．研究の方法

研究方法として次の諸点を意識した研究を試みた。

（1）言語間（方言間）の類似点と相違点を整理できるような分類の枠組みを設定する。
（2）個々の現象を相互に関連づけた横断的な視点を持った分析をおこなう。
（3）文脈や発話場面が明瞭な小説、映画、漫画のデータを積極的に活用し、運用論的な制約を合わせて記述する。

４．研究成果

以下に、本研究で得られた具体的な成果の幾つかを列挙する。

（1）現代語と中古語の史的対照の観点から、現代共通日本語のダイクシス表現（の運用）に見られる視点制約・人称的性質が、歴史的展開の中で変化・確立してきたことを、「やる／くれる」、「行く／来る」などの「直示述語（deictic predicates）、敬語、指示詞を例に論じた。合せて、日本語ダイクシスの（歴史的）現象の一部を他言語（主に韓国語）や方言（島根県出雲方言）との比較対照から相対化した。直示述語では、歴史的に視点制約が生じ（または、視点制約がより厳しくなり）、話し手の視点が顕現化している（強まっている）。敬語や指示詞では、対立的視点（人称区分）を反映する聞き手顧慮の運用が歴史的に強まってきている。

（2）話し手が聞き手のもとへと移動する場合—典型的には、相手に呼ばれて「いま行くよ」と返事をする場合—、現代共通日本語では「行く」が使われるが、古代語では、日本語の一部の方言と同様、「行く」のみならず、「来」が使われていた（本研究では、この点を、中古和文資料 10 作品の「行く／来」の全例調査によって明らかにした）。歴史的に、「来る」の運用において視点制約が厳しくなっており、話し手が聞き手の領域に移動する場合、到着地の聞き手に視点を置いた「来る」の運用ができなくなっている。これは、上の（1）で述べた他の様々なダイクシス表現の運用に見られる歴史的変化の方向性と軌を一にする。

（3）「来る」が補助動詞化した「てくる」の用法の１つに、主語の空間的移動を表さず、話者への「行為の方向づけ」を表す用法がある。この用法は、①「物の移送」を表す A1 型（例：ケンが私に本を送ってきた）、②「物の授与」を表す A2 型（例：ケンが私に本を渡してきた）、③「行為の直接的受影」を表す B 型（例：ヤクザが私を脅してきた）、④「行為の間接的受影」を表す C 型（例：会社が給料を減らしてきた）の 4 つに下位区分できる。とりわけ、③、④の「てくる」は、「受影マーカー」として、それぞれ、直接受身文、間接受身文との類似性を有している。

「行為の方向づけ」用法は、近世期以降、A1 型から次第に用法が拡がっていった点が森（2010）の歴史的調査によって明らかになっている。本研究では、さらに、「てくる」標示の義務性に着目し、日本語が話者視点の明示化を強めてきた可能性を夏目漱石『坊っちゃん』の原文版と現代語訳版とのテクスト比較等から指摘した。さらに、韓国語「V-ota」、中国語「V-lái」では用法の範囲が A1 型に留まっており、「ota」、「来」の標示も随意的である点を指摘し、対照言語的観

点から問題の「てくる」の歴史的現象を相対化した。

(4) 日本語の本動詞型（A 型），補助動詞型（B 型）の授与動詞構文は、それぞれ、物の授受、事態の授受を表すとされることが多いが、本研究では、事態の授受を表すとされる日本語の補助動詞型の授与動詞構文（「てくれる／てやる」構文）が 4 つの構文パターン（B1α 型, B1β 型, B2 型, B3 型）に分類できることを示し、この分類の有効性を、同じアジア言語である韓国語、中国語、マラーティー語の「V＋授与動詞」構文（「V＋cwuta」、「V＋deNe」、「V＋gěi」）との比較対照を通じて主張した。これらの言語の「V＋授与動詞」における授与動詞の文法化の度合いは、gěi（中）＜deNe（マ）＜やる（日）＜ cwuta（韓）＜くれる（日）の順に高くなっている（「物価が下がってくれた」のように、主語名詞句が恩恵を施す意図を持たない（授受関係が認められない）B3 型の「てくれる」は日本語授与動詞構文の興味深い特色の一つである）。本研究では、さらに、これらの言語との対照研究から得られるインプリケーションとして、授与動詞の構文パターンの範囲に関する通言語的な含意階層（A 型＜B1α 型＜B1β 型＜B2 型＜B3 型）を提出し、授与動詞構文の類型論的研究をおこなっていく上での 1 つの見通しを与えた。

(5)「あの太郎が勝った」のように、日本語の連体形指示詞（「あの／この／その」）が、「指示対象が関わる事象の成立可能性は低い」という話者の前もった想定を表す「モーダル用法」を持つ点を明らかにした。この現象は、指示詞研究の観点から見ても興味深いものであるが、ここでのモーダル的意味は、命題的・真理条件的な意味から独立しており（すなわち、慣習的推意の次元の意味であり）、意味論・語用論の観点からも注目される現象である。モーダル指示詞は、統語的には名詞句のみを修飾する一方で、意味的には名詞句を含む（テンスを除く）命題全体を計算に入れるという形式と意味のミスマッチが見られることを論じた。

(6) 英語の指示詞において、話し手の近くにある対象（場所）が聞き手への視点移動（指標詞シフト）によって、遠称指示詞 that（there）（Fillmore 1975）で指示される現象について考察した。たとえば、次は映画 *Charade* からの例であり、アメリカ大使館の事務官であるバーソロミューが、夫チャールズの横領事件に巻き込まれた未亡人レジーに、一枚の写真を見せる場面である。話し手のバーソロミューは、自身が手にする写真を that で指示している。

（i）**BARTHOLOMEW**: Mrs. Lampert, would you look at <u>that</u> photograph and tell me if you recognize anyone please? Just a moment, have a good look.（「ランパートさん、では、<u>この</u>写真を見て見覚えのある人がいたら教えてください、いいですね？ちょっと待ってください。［虫眼鏡を渡して］よく見て。」（『名作映画完全セリフ集 スクリーンプレイ・シリーズ 138 シャレード』p. 54）

このような that（there）は、聞き手の注意を対象に向けさせる（対象への聞き手の注意喚起を促す）場面で現れる点を、映画、漫画、小説からの具体的なデータによって明らかにした。また、聞き手への視点移動を反映した問題の遠称指示詞のデータは、近年の指標詞研究で理論的焦点の一つとなっている指標詞シフトの現象として捉えることができることを論じた。

(7) グライス（Grice 1975）は、慣習的推意を導出する表現として、談話連結詞の *therefore* と *but* の 2 つを取り上げているが、近年、自然言語には多様な慣習的推意を導出する表現があることが明らかになってきた（Potts 2005 等）。慣習的推意は、定義上、真理条件が適用されないため、否定、条件、疑問等のスコープには含まれない。これをテストに調査してみると、日本語では、多様な言語表現が慣習的推意表現として認定できることが明らかとなった。下にその一部を列挙する。

①敬語（「お～ {になる／する}」「ます」等）（例：山田先生が<u>お</u>帰り<u>になりました</u>。）
②卑罵語・悪態語（「～やがる」「～ごとき」等）（例：太郎<u>ごとき</u>に負け<u>やがった</u>。）
③取り立て助詞（「さえ」等）、終助詞（「よ」「ね」等）
④談話連結詞・談話標識（「それはそうと」「ところで」等）
⑤感動詞、間投詞、感嘆表現（「まあ」「～とは」等）（例：あの部屋の<u>まあ</u>汚いこと。）
⑥ぼかし表現（「ちょっと」「とか」等）（例：<u>ちょっと</u>ハサミある？、彼女<u>とか</u>っている？）
⑦挿入表現（例：「ここだけの話だけど」、「<u>山田さんだったか</u>、さっき電話あったよ。」）
⑧話者指向的副詞（「幸いにも」「よく

も」「やはり」「いやに」等）

この他、(3) で挙げた受影マーカーの「てくる」や（5）で挙げたモーダル指示詞なども、慣習的推意表現とみなすことができる。

日本語学では、上で列挙した表現の幾つかは、命題内容には収まらないことから便宜的にモダリティとして処理されているものもあるが、新たに、慣習的推意のカテゴリーを設定することで、やや雑多な表現群となっていた日本語モダリティの中身の整理・限定化にもつながることが期待される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13 件）

1 Sawada, Osamu and Jun Sawada（2014）The Meanings of Modal Affective Demonstratives in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 21: 181-196. Stanford, CA: CSLI Publication（査読無）

2 澤田淳（2014）「日本語の授与動詞構文の構文パターンの類型化—他言語との比較対照と合わせて—」『言語研究』145: 27-60（査読有）

3 澤田淳（2014）「視点の文法とダイクシス—文法論と語用論の接点—」『青山語文』44: 105-127（査読無）

4 澤田淳（2013）「視点、文脈と指標性—英語指示詞における聞き手への指標詞シフトの現象を中心に—」『語用論研究』15: 1-23（査読有）

5 澤田淳（2013）「COME／GO の直示情報と選択システム—直示的中心の下位区分と階層化の視点から—」児玉一宏・小山哲春（編）『言語の創発と身体性—山梨正明教授退官記念論文集』359-385. ひつじ書房（査読無）

6 澤田淳・澤田治（2013）「日本語モーダル指示詞における意味の多次元性—意味論と語用論のインターフェース」『KLS』32: 73-84（査読有）

7 澤田淳（2013）「視点、文脈と指標性—英語指示詞における聞き手への視点移動の現象を中心に—」『日本語用論学会第 15 回大会発表論文集』8: 89-96（査読無）

8 澤田淳（2012）「ダイクシスを捉える理論的枠組み—日本語ダイクシス表現の体系化の試み—」『Ars Linguistica』19: 41-63（査読有）

9 澤田淳（2012）「ダイクシスにおける直示中心の階層スケールと語用論」『日本語用論学会第 14 回大会発表論文集』7: 65-72（査読無）

10 澤田淳（2012）「日本語の直示的移動動詞に関する歴史的研究—中古和文資料を中心に—」『KLS』32: 97-108（査読有）

11 澤田淳（2011）「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座５ 主観性と主体性』165-192. ひつじ書房（査読無）

12 澤田淳（2011）「日本語ダイクシスの歴史的形成と領域区分化」『日本認知言語学会論文集』11: 596-599（査読無）

13 Sawada, Osamu and Jun Sawada（2011）On the Expressive Use of ano ‘that’ in Japanese: A Probability Scale Approach.『日本語用論学会第 13 回大会発表論文集』6: 49-56（査読無）

〔学会発表〕（計 11 件）

1 澤田淳（2014）「指示詞の対照研究—語用論との関連から—」日本中部言語学会第 61 回定例会、静岡県立大学、2014 年 12 月 13 日.

2 澤田淳（2014）「日本語の直示述語「V-てくる」の歴史—「行為の方向づけ」を表す用法の発達—」日本語用論学会第 17 回大会、京都ノートルダム女子大学、2014 年 11 月 29 日.

3 澤田淳（2013）「ダイクシスの観点からみた日本語の複合動詞の歴史」国際シンポジウム 2013 日本語およびアジア諸言語における複合動詞・複雑動詞の謎、国立国語研究所、2013 年 12 月 14 日.

4 Sawada, Osamu and Jun Sawada（2013）The Modal Demonstratives in Japanese: A Mismatch between At-issue and Non-at-issue Meanings. The International Congress of Linguists (ICL 19). University of Geneva, 2013 年 7 月 23 日.

5 澤田淳（2012）「視点、文脈と指標性—英語指示詞における聞き手への視点移動の現象を中心に—」日本語用論学会第 15 回大会、大阪学院大学、2012 年 12 月 1 日.

6 澤田淳（2012）Grammaticalization of Benefactive Constructions and Their Synchronic Variations. The 22nd

Japanese/Korean Linguistics Conference. The National Institute for Japanese Language and Linguistics, 2012 年 10 月 13 日.

7 澤田治・澤田淳（2012）「日本語モーダル指示詞における意味の多次元性—意味論と語用論のインターフェース—」関西言語学会第 37 回大会、甲南女子大学、2012 年 6 月 2 日.

8 澤田淳（2011）「日本語の直示的移動動詞に関する歴史的研究—中古和文資料を中心に—」関西言語学会第 36 回大会、大阪府立大学、2011 年 6 月 12 日.

9 Sawada, Osamu and Jun Sawada（2011）The Meanings of Modal Affective Demonstratives in Japanese. The 21st Japanese/Korean Linguistics Conference. Seoul National University, 2011 年 10 月 22 日.

10 澤田淳（2011）「ダイクシスにおける直示中心の階層スケールと語用論」日本語用論学会第 14 回大会、京都外国語大学、2011 年 12 月 4 日.

６．研究組織

(1)研究代表者

澤田 淳（SAWADA JUN）
青山学院大学・文学部・准教授
研究者番号：80589804